

Anyのコア的意味

田 中 実*

The Core Meaning of *Any*

Minoru TANAKA

要 旨

本研究では、*any*の意味考察に対して、そのコア的アプローチの妥当性を探り、そのコア的意味を提唱した。そして、そのコア的意味の認知的説明力についても検証を試みた。

*Any*の意味は、単に数量の問題ではない、また *some* という語の非肯定版というわけではない。それ独自の意味を探る必要がある。*Any*は、肯定、疑問、条件、否定においてその用法に類似性、共通性がある。また *any*の肯定用法には、その種々の意味にある共通なものを見ることができる。そうした考察に基づいて、*any*のコア的意味、その意味展開を次のように提唱した：(i) 任意のどれでも ⇒ (ii) 周辺も含んで ⇒ (iii) *all, every* というプロセス。肯定で使われる *any*の種々の意味、「*Any N* 関係詞節」の意味、そして非肯定の疑問・条件、否定の *any*の意味、これらすべてにこの *any*のコア的意味を確認することができる。さらに、このコア意味は、修飾する名詞の可算単数、複数に対する違いについても、そこにどのような事情があるのか示唆を与えてくれる。

キーワード：コア、任意、周辺、多義、文脈の意味

1. 本研究の目的と背景

英語語彙 *any* は、極めて日常語、基本語であり、母語話者用英英辞書にほとんど説明がないくらいに母語話者にとってはまったく説明を要しないものである。また、その意味は直感的には難しくないように思える。したがって、*any*の意味は本来簡単であると思われる。だが、従

*准教授 英語学・英語教育

来のこの語に対する辞書・文法書、学術研究による説明は、その意味の理解を必要以上に困難にしているように思われる（田中 2007）。一方では、その意味をあまりに単純化しすぎて単なる数量の問題として捉えている場合がある。Any は、確かに数量との関わりはあるが、many/much, (a) little/few などとは大きく異なる。Any を単に数量の問題として捉えてしまうと、この語の持っている最も重要な意味を見失ってしまう。その一方で、この any の意味記述を必要以上に複雑にしている場合もある。Any の意味をその意味特徴（semantic features）から捉えようとする場合である。これほどでもないかもしれないが、よく辞書に記載されている文法的分類（肯定、疑問、条件、否定）による説明は、any が雑多な多義として捉えられていて、その意味をわかりにくくしていると思われる。

本研究の目的は、語彙 any が持つ本来の意味、その語感が持つ意味をできるだけ正しく、しかも平易なものとして捉えることである、その試みである。極めて日常語であり、極めて基本語である語として難しくないはずのその意味をできるだけそのようなものとして捉える試みである。具体的には、any の中心的な意味（コア的意味）とその意味展開の提唱とその検証である。

2. Any に関するこれまでの考察

Any についてこれまで3度にわたって考察してきた（田中, 2007; Tanaka, 2008; 田中, 2009）。これらの研究は本研究に対して有益な資料、洞察を提供してくれる。そこでそれらについて重要点を概観しておく。

2.1 『Any の意味記述の困難さ』（田中, 2007）

田中（2007）では、any の意味記述に関して辞書及びこれまでの学術研究を調査した。英和辞典に共通する特徴は、統語的な観点から疑問文、条件節、否定文、肯定文での使用を区別して意味、用例を記載している。もちろん、英和辞典がすべて同じ記述の仕方ということはない。だが、こうした英和辞典からは次のような傾向が観察される。(A) Polarity 的な記述、つまり any は非肯定文（疑問文、条件節、否定文）で使われ、肯定文では some を用いる。そして、some が非肯定文で使用される場合には、肯定への期待、予期があるという但し書きがつく¹。(B) 肯定文で使われる any の項目を提示。(C) any の修飾する可算名詞の単数、複数の違いを提示。

英英辞典（特に母語話者用英英辞典）は、非肯定文（疑問文、条件節、否定文）、肯定文で

の any の使用、可算単数・複数名詞における意味の違い等については、その分類がまったく不十分であり、その掲載もしていたりしていなかったりである。基本的に学習のための情報量が決定的に不足している。ネイティブにとっての辞書なので、any のようなあまりに基本的な語については参照することがまずないので、これでも別に問題はないものと思われる。一つ英和辞書にはない特徴的な意味の記載がある：「相当の、かなりの」という意味の記載である。

Any の学術研究には、大きく分けると二つの特徴がある。一つは、Hirtle (1988) に代表されるように、any の意味をいささか単純に「数量の問題」として捉えているもの。もう一つは、any の意味をその意味特徴 (semantic feature) から捉えようとするもの。後者には、Sahlin (1979)、池内 (1985)、Hirtle (1988)、川瀬 (1989) などがあった。Sahlin (1979) では、any の多くの意味特徴が提案された。Hirtle (1988) は、両者に出てくるが、両方の捉え方をしている。

こうした any の意味記述の比較検討の中で明らかになってきたのは、その意味を明解に捉えることの難しさである。まず、『訳』による説明の首尾一貫性の欠如。例えば、「～でも」という訳語を条件における意味として特徴づけても、常に条件節の中で日本語の「～でも」となるわけではない。「何か」と訳せる場合もある。しかも、「～でも」と「何か」では意味が明らかに違う。

第二に、単・複数名詞と数量・種類の意味の混乱。Any が複数名詞を修飾する場合「数」の意識させるので「数量の不特定性」、単数の場合は「種類の不特定性」を表すと説明されることがある。だが、複数でも種類を表す。

第三に、Sahlin の Any I, Any II, Any III の区別、とくに実際の文での区別が難しい。Any I は、Any II と区別する重要な特徴として “lightly quantitative” がある。Any II の中の意味分類に “Non-contrastive use” というのがあり、日本語では「何か～」に近い。両者とも意味が弱く、こうした説明では区別がつきにくい。Any II の例文としては、“Yet the fact remains that such institutions do set men at odds with their fellows. Is there any way out of the predicament?” (Sahlin 1979: 97) だが、これと Any I の用法とはあまりに微妙である。“lightly quantitative” と “Non-contrastive use” では違いがわかりにくいし、実際の例文ではもっとわからない。Any III は、主に肯定文に使用されるという意味ではわかりやすい。だが、その意味特徴が質、数量の両者において任意、不特定性を示すので、Any II との区別が難しくなる。

第四に、Sahlin の “Contrastive use” の有用性。Sahlin (1979) のあげる “Contrastive use” とは、文脈的に拘束されていて、具体的には any が付く名詞はすぐ前に言及されているという状況である。だが、これを any の意味と考えるべきかどうかは判断が難しい。あまりに文脈的

な意味だからである。

最後に *any* の意味の全体像（全体の意味構造）をつかむ難しさがある。*Any* の意味の記述ではっきりしない点は、上記以外にもいくつかある。例えば、*any* が関係詞節の先行詞を修飾する場合の問題（cf. Sahlin 1979: 124）、英和辞典が「種類」と呼ぶものは、質（quality）とは違うのか、任意性とはどう違うのかという問題、stress（強勢）の問題などである。「*any* が関係詞節の先行詞を修飾する場合」については、LDCE の “as much as possible”（例：They’re going to need *any* help they can get.）にあたると思われるが、例文（46）Borrow *any* book that interests you.（あなたにとって興味ある本を借りなさい）（Super Anchor）にあるように、そのような意味になるとも限らない。質（quality）と種類（kind）は似て非なるもののように思えるし、集合の内「どれか」も「どれをとっても」も両者ともに任意と思える。だが、両者は明らかに違う。このように個々の領域でも *any* の意味を明快に捉え記述することはむずかしい。したがって、全体像を体系的に捉えようすることはほとんど不可能のように思われた。

2. 2 “Reconsideration of Some and Any” (Tanaka, 2008)

Tanaka (2008) では *any* は *some* の非肯定版ではないことを示した。*Any* は、可算単数名詞を修飾する。肯定の場合を特別用法だとしても（本論ではそうは考えないが）、非肯定の場合でも「*any*+可算単数名詞」は珍しくない。もちろん非肯定に現れる「*any*+可算単数名詞」は、「*some*+可算単数名詞（ある～）」の非肯定版ではない。また、*any* が否定で使用される場合、*not any* N は全否定を表すわけで、*some* で示されるような不定の数量を表すわけではない。

疑問文、条件節で使用される「*any*+可算複数名詞」。この場合、一見 *some* の非肯定版として問題なさそうだが、そうとも言えない。Were there *any* students in the classroom? を例にとると、その答えとして複数学生がいる必要はなく、ひとりでもいい。一人もいない場合のみ、答えが “no” になる。また、If you have *any* pencils to spare, will you lend me one?（新英和中辞典）という例では、この場合貸してくれる鉛筆が1本あればよい、何も複数なくてもよい。この2つの例から言えることは、ゼロではない最小の数・量があるかが問われていて、*some* の表す不定のある数量の概念とはかなり異なる。

2. 3 『Anyの意味：英英辞書から anyの意味を探る』(田中, 2009)

Any の意味記述に関して、英英辞書は英和辞書とはかなり違い、全体的な情報量としては不十分ではある。だが、母語話者の直感をよりよく反映したものと考えられる。したがって、英和辞典などにはない *any* の語の真実を示してくれると思われる。そこでこの点から英英辞書を精

査した結果、次の点が明らかになった。anyの意味特徴を示す重要なキーとなるフレーズがある：no matter which/what, how much or how little, how many or what, regardless of quantity or number, in whatever quantity or number, the smallest quantity or number of などである。「肯定、条件の any の類似性」、「肯定、否定の any の類似性」が示された。田中（2007）で言及した疑問と条件の any の類似性と合わせると、肯定・非肯定の any 全体に共通した意味を示唆している。その一方で、肯定文の any に種々の意味があること、「Any N+関係詞節」についても考察した。最後に「弱い意味、強い意味の any」、「弱い意味の any と冠詞 a、ゼロ冠詞の関係」、Sahlin（1979）の Any I, II, III との関係を考察し、それを図式化してまとめた。

肯定文の any の種々の意味は、次のように分類した。「Any N+関係詞」のパターンをとるものによく特別な意味を与えている、あるいはそれを一つの意味分類項目に与えているので、このパターンのものでないものに分けて考察した。ここでは、例文は代表的なものだけを掲載している。

「Any N+関係詞」のパターンでないもの：

- (1) どちらかという to every, all に近いもの、結果として every, all と言えるもの

Any child can do it. (Webster's)

- (2) どれでもいいがどれか1つ（Nが数詞を伴っていればどれにしろその数だけのもの、単に複数ならどれにしろその複数のもの）

You can take any box on the table. (E-Gate)

Take any two cards from the pack. (Super Anchor)

Any comments will be welcome. (Lexis)

- (3) どんな悪いものでも、どんな良いものでも

Any bed is better than none. (Genius)

「Any N+関係詞」のパターンのもの：

- (1) (ふつうに) どんな～でも

I don't smoke. I don't drink. I'm perfect. Ask any man I ever dated. 私はタバコは吸わないし、酒も飲みません、私は完璧（かんぺき）です。私がこれまでにデートした男性だれにでも聞いてみてください (Wisdom)

このような定義、訳語が与えられていることがよくあるが、実際にはこの用例は極めて稀なように思われる。たいていは、下記の(2)～(5)に当てはまる。上記の例は、誰

にでもいいから「ひとり」というわけではない、つまり次の (3) (i) ではない。またデートした男性すべてにというわけではない、つまり (2) ではない。

(2) every, all になる場合

Read *any* books you find on the subject. (RHD)

Any child who attempts to escape is beaten. (LDCE 3rd)

(3) (i) 可算単数名詞なら「何でもいいから1つ」となる場合

Take *any* book you like. (OALD 6th)

(ii) 複数名詞, あるいは数詞がついた複数名詞の場合

Pick out *any six* you like. (RHD)

(4) できる限りの

They're going to need *any* help they can get. (LDCE 4th)

Take *any* amount you like. いくらでも好きなだけ取りなさい (N Proceed)

I'll loan you *any* books you need. 本は必要なだけ貸してあげる (新英和中)

(5) どんな「悪い」ものでも (どんな「よい」ものでもというのも可能であろう)

Any advice (=Whatever advice) that you can give me would be greatly appreciated.)

「弱い意味の any」と「強い意味の any」とは, any が 'no matter what/which' のような「強い」意味を持つ場合と特にそのような強い意味を持たない場合についてである。前者が「強い意味の any」, 後者が「弱い意味の any」。この点を, Sahlin (1979) の Any I, II, III との関係から検討, 考察した。Sahlin の Any III は, 明らかに肯定文の場合で, no matter what / which 等を意味特徴とする「強い any」に相当している。Sahlin の Any I, Any II は非肯定文での any の意味分類である。Any I は不定冠詞的 (indefinite non-assertive article) で弱い数量的意味 (a light quantitative sense) を特徴とし, Any II は数量詞 (quantifier) であり, Any I と比べてかなりの強い意味 (considerably more pronounced meaning) を持つ。上記の非肯定文の「弱い意味の any」と「強い意味の any」はそれぞれ Sahlin の Any I, Any II に相当すると考えられる。だが, Sahlin の Any I は “any sort of”² の意味を有しており, この点において「弱い意味の any」とは一見折り合いが悪い。しかし, この Any I の “any sort of” の意味は「冠詞 a あるいはゼロ冠詞 (複数, 不可算名詞)」と区別する重要な特徴ではないかと考えられる。「冠詞 a, ゼロ冠詞」の特徴の一つには「総称」の意味があり「カテゴリー」を示す。それに対して “any sort of” の特徴を持つ Any I の関係は, そのカテゴリーの中のメンバーを指すのではないかと思われる。Any I はメンバーを指すとは言え, やはり弱い意味であり, 強くどのメンバーであろう

Any のコア的意味

というような *no matter what / which* 等で表される意味を特徴としていない。図式化すると、次のようになるであろう。

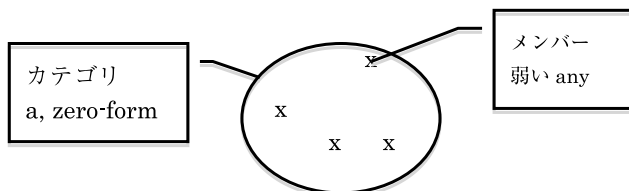


図1 : 「冠詞 a、ゼロ冠詞」と「弱い any」の関係 (田中 2009: 166)

Sahlin (1979: 94) は、Any I と「冠詞 a、ゼロ冠詞」の違いについてさらに次のように述べている：

The main difference between Any I and the zero-form, however, is perhaps the quantitative one: while Any I has a lightly quantitative element, the zero-form has not ... Examples with any such as those below are more “concrete” than the corresponding examples with the zero-form and have such a light quantitative element.

so I don't think that any of them will have any *difficulties* in getting jobs in industry when they've finished.

The force of the author's analysis (if indeed it has any *force*) can be felt by the reader, I believe, only after ... p.94

(下線は筆者による)

Any I は弱い意味であるが、それでも個々のメンバーを指し、それが “concrete” ということであると思われる。また、上記で Sahlin が “quantitative” と言っているのはその個々について弱い数量的な意味を言っているのであろう。

Any はすべての場合に (Any II, III を含めて) 個々のメンバーに言及するのがその意味特徴と思われるので、上記をまとめると次の図のように表されるのではないと思われる。

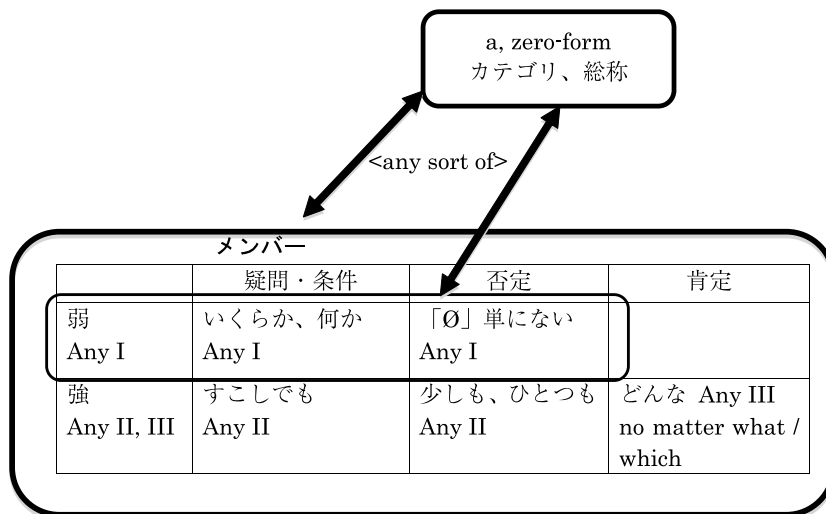


図2：「弱い、強い Any」, 「Any I, II, III」及び「冠詞 a, ゼロ冠詞」の関係
(田中 2009 : 167)

3. Any のコア的意味の提唱

3.1 Any のコア的意味推察の可能性

上記「Anyに関するこれまでの考察」を元にしなが、 any が「コア的」意味を持つ可能性を推察する。「コア的意味」とは、ある語彙の文脈に依存しない一つの中核的な意味をいう（田中茂範 1990）。その語彙の多義と見えるものは、文脈との関わりで表れてくる。その語彙の多義のどの意味にもこの「コア的意味」が程度の違いがあっても存在する。

3.1.1 単に数量の問題ではない any 独自の認知的意味探求の必要性

Any の意味は単に数量の問題ではない。数量との関わりはあるが、 many/much, (a) little/few などとは大きく異なる。田中（2007）において any の意味記述の困難さを示したが、それは any の意味が単なる数量の問題ではないということを表している。田中（2009）では、英英辞典の記述から any の意味をさらに深く考察したが、単に数量の問題ではないことはより明らかになった。Any は数量という形式な、あるいはそれに近い意味を持つのではなく、そうではない認知的意味があるものと思われる。その認知的意味が探求され説明される必要がある。Tanaka（2008）では、any は some の非肯定版ではないことを示した。この点からは、some と

の関係ではなく any 独自の意味を探る必要があることがわかる。

3.1.2 Any の意味の肯定, 疑問, 条件, 否定における類似性

Any の「コア的」意味を提唱する理由のひとつとして, any の肯定, 疑問, 条件, 否定における類似性がある。田中 (2007) では, any の意味記述の際に, 多くの辞書が疑問文, 条件節で使用される any をひと括りにしている点に注目して, 疑問・条件における any の意味の類似性を示した。両者とも命題を宙ぶらりんにする。同じ非肯定でも否定の場合は命題を否定してしまうのでこの両者では性質を異にする。Any が疑問・条件という同じ項目で説明され例文があげられているように確かにその訳, 意味が類似している。さらに田中 (2009) では, 肯定と条件, 肯定と否定それぞれの間での any の意味の類似性を考察した。前者については, Random House Dictionary においてやはり any の肯定文の例, 条件節の例が同じ定義項目の中に記されている。

Random House Dictionary

- 1 one, a, an, or some; one or more without specification or identification:

If you have *any* witness, produce them.

Pick out *any* six you like.

条件節の例では, 「証拠なるものがあればどんなものであっても」という意味で解釈できる。また, 肯定文の方は, そのまま「好きなもの何でも6つ」と解釈される。まったく同じものとは言えないまでも, そこには共通した意味を見ることができる。

肯定と否定での any の意味類似性は, Webster's New World Dictionary 4th と COD 8th の次の定義と例文の比較に基づく。

Webster's

1. one, no matter which, of more than two [*any pupil may answer*]

COD 8th

- 1 a. one, no matter which, of several (*cannot find any answer*)

両辞書とも同じと言っている定義を与えているが, それぞれが挙げている例文は, 一方では肯

定の例、もう一方では否定の例を挙げている。つまり、これらの例文の any には類似した意味が読み取れるのではないと思われる。上記の例を参考に肯定文と否定文の any を再考してみると、そこにはかなりの共通点がある。肯定文の any は「どんな周辺の、悪い例でも」ということである。否定文の any は、その周辺の、悪い例ですら否定するので全部否定となる。さらに数量について言えば、否定文の any は「どんな少ない数量も」否定するので、やはり全否定となる。やはり、この二つは類似する。

これらは、肯定、疑問、条件、否定のすべての組み合わせで any の意味の類似性を論じたわけではないが、ここからでもこれらに使用される any の意味の共通の意味を推察することができる。

3.1.3 肯定文における any の種々の意味の共通性

「肯定文の種々の any の意味」を田中（2009）で検討したが、これらはさらに整理でき、「種々の」の中にある共通なものを見ることができると思われる。次節 3.2 で any のコア的意味の仮説を提唱した上でどう説明されるか示したい。

3.1.4 肯定、疑問・条件、否定における any の意味の共通項

田中（2009）の『『弱い意味の any』と『強い意味の any』』の提案とそれに基づく考察は、肯定、疑問・条件、否定すべてにわたる any の意味の共通項を具体的に示してくれるように思われる。非肯定文における「弱い意味の any」の Any I は「冠詞 a, ゼロ冠詞」と類似している。その区別は、そこで述べたように「冠詞 a, ゼロ冠詞」はカテゴリーを指し、「弱い意味の any」Any I はカテゴリーのメンバーを指すということである。Any がメンバーを指すということは、「強い意味の any」Any II, Any III, 疑問・条件、否定、肯定すべてについても当てはまると思われる。

3.2 Any のコア的意味

3.2.1 Any のコア的意味仮説の提唱

以上から any の意味を次のように推察する：

(i) 任意のどれでも ⇒ (ii) 周辺も含んで ⇒ (iii) all, every というプロセス

Any はコア的意味構造を持つものとする。つまりそれは、any のどの用例にも常にある中

心（コア）となる意味が感じられるということである。辞書などに取り上げられる様々な any の意味（典型的には肯定、疑問、条件、否定におけるそれぞれの any の意味）も、さらに any が実際どのような文脈に表れる場合でも常にある共通の意味があると考えられる。そこから文脈特有の意味が表れているのである。

肯定で使用される any, 同じ肯定でも any N が「すべて (all, every)」となる場合の意味, 非肯定文で使用される any, さらに様々な用法があるが、それらが関係はしているが（だからこそ辞書で同じ語彙項目に入っているわけだが）別々な意味であるとも考えることも可能である。そうした構造を持つ多義語として any を捉えようとすることも可能である³。だが、ここでは any はそのような多義構造を持つのではないと考える。Any の意味は一つであり、「別々な意味」すなわち多義に見えるものは文脈による変容と考える。このことを示す典型例は、代名詞 “I”（私）。代名詞 “I” は、文脈（使う人により）により内容が変わるが、意味は一つである。

「任意のどれでも」とは、any はそれが修飾する名詞の任意の個々のメンバーを指す。どのメンバーかという指定、特定は無い (non-selective)。また、あくまで個々のメンバーを指すのであって、全体を指すことは無い (+ individuality, -totality)。

「周辺」とは、any が修飾する名詞の指すカテゴリーのメンバー性が周辺のなものを言う。すでにかなり以前から指摘されていることであるので (Rosch 1975)、詳細は不要であると思われるが、同じカテゴリーのメンバーであってもそのメンバー性にいい悪いがある。そのカテゴリーのメンバーとしては、典型的、中心的なものもあれば、メンバー性の低い周辺のメンバーもある。Any は任意のメンバーを指すので周辺のメンバーもその任意の中に入るわけであるが、周辺のメンバーに焦点が行く。

あるカテゴリーについて、その周辺のメンバーに当てはまるのであれば、中心的メンバーは当然「すべて」のメンバーに当てはまることになる。ただ、上記で「プロセス」という用語を使っているように、いきなり any が「すべて」という意味になるわけではない。上記の段階（プロセス）を踏んでその結果として「すべて」という意味なる。そうした段階を踏むので「すべて」という意味になった場合でも、本来の「任意のどれでも」という意味が常に基本の意味として背景に残る。

この any の意味記述の重要な特徴は、そのコアの意味「任意」「任意のどれでも」さらにその基本的な意味展開「『周辺を含んで』→『すべて (all, every)』」はどちらも平易なものであるということである。それは any の本来の意味に対する直感を反映しているように思われる。

3.2.2 Anyのコアの意味を「任意」とする理由

Anyの意味の特徴は、「任意」、「周辺性」であると思われる。多くの場合、むしろ「周辺性」の意味が感じられるように思われる。だが、そうでない場合もある。田中(2009)で考察したように、「弱い意味 any」はそのような「周辺」の意味は感じられない。そして「周辺性」が感じられない場合には「任意」の意味がある。しかも「周遍的」意味には任意の意味を見て取ることができる。また、all, everyに近い意味になる場合は「周辺性」の意味から来ている。つまり、そこにも「任意」の意味がある。

3.2.3 コア意味仮説の検証

では、この any コア意味仮説はその「様々な」意味をどのように合理的に説明するのであろうか。

3.2.3.1 肯定文における種々の any の意味, 用例の検証

まず、先に取り上げた肯定文における種々の any の意味, 用例について、この意味仮説から再考してみる。なお、以下で「*」に続くコメントは筆者によるものである。

肯定の any, 「Any N + 関係詞節」のタイプでないもの:

(A) どちらかという every, all に近いもの, 結果として every, all と言えるもの

直接は「周辺」という意味から all, every の意味になると思われる。だが、この「周辺」は「任意」という意味からきていると考えられる。

特徴的な例文:

[主語に対して]

Any child can do it. (Webster's; Readers)

Any child would love that. (American Heritage)

Any dictionary [dictionaries] will do. (Wisdom)

Any bus that stops here goes to the station. (N Proceed) (*周遍の意味が低い)

Any tea will do. (新英和中辞典) (*物質名詞に対して)

[動詞の目的語に対して]

Save any foreign stamps for me. (新英和中辞典)

I would overcome any weakness, any despair, any fear. Collins (COBUILD English

Anyのコア的意味

Dictionary, 2nd) (抽象名詞に対して)

*抽象名詞, 物質名詞に対して使われた場合は, 種類, 質が問題となる。「どのようなお茶」「どのような弱さ」というように。

[前置詞の目的語に対して]

Cars can be rented at almost *any* U.S. airport... (Collins COBUILD English Dictionary, 1st)

Any が単純に *all*, *every* の意味ではなく, 周辺のメンバーを指して, そこから結果として「すべて」という意味になることをうまく示す例がある。次の例は, そうした意味的プロセスを示す例である。

any fool knows that (COD 8th: whichever is chosen)

Any が単純に *all* を意味しないことをうまく示している。*any* fool (どんな馬鹿でも) とは「*all* fools (馬鹿はみんな)」という意味ではない。「誰でも, みんな」というのに「その周辺に存在するものでも」という言い方で間接的に示している。

(A') どんな悪いものでも, どんな良いものでも

(A) の下位分類と考えた方がよい。周辺メンバーを示す意味からはっきりと最悪 (最良) メンバーを示した場合である。以下はその特徴的な例文:

Any bed is better than none. (Genius)

Any place would be better than here. (E-Gate)

Any noise bothers my uncle. (Sahlin 1979: 22, 120)

比較の文がほとんどで, 典型的には *none*, *nothing*, *no*~などとの比較対照による。

(A') を (A) の下位分類と考えるのは別に問題がないと思われるが, さらにそれを支持する (A) と (A') の中間的な *any* の用法もけっこう見受けられる。

I'm prepared to take *any* advice ... (COBUILD 2nd) (*どんな厳しい~)

I am ready to accept *any* proposal(s). どんな提案でも受け入れる用意がある (E-Gate)

見方によれば、(A) の例文の多くも「どんな悪い（時には「良い」）」という意味に取れる。ただ、(A') ほどには明示的ではない。そういう理由で (A') を特別なものとして下位分類項目にあげることにした。

(B) (明示的に) *all, every* の意味にならない場合

田中 (2009) では、「どれでもいいがどれか 1 つ (N が数詞を伴っていればどれにしるその数だけのもの、単に複数ならどれにしるその複数のもの)」として取り上げていた項目である。だが、以下の分析が示すようにこのような分類の方が妥当と思われる。はっきりと「すべての」メンバーが意図されないケースである。

「Any N (可算単数)」は必ずしも 1 つとはならない。1 つということがポイントということではない。かといって、結果的にも (A) のように「すべて」を意味するものではない。

You can take any box on the table. (E-Gate)

You can read any book you like. 「好きな本ならどれでも (1 冊) 読んでよい」 (Lexis)

上の例で「取っていい箱」は、必ずしも 1 つとは限らない。2 番目の例文の訳に「(1 冊)」というように括弧に入っているのは、N が単数でも断定的に 1 つになるとは限らないことを意味していると思われる。

「Any N (可算複数)」の場合 (例: *You can take any boxes on the table*)、もちろん複数のものが意図されている。だが、*all* というわけではない。すべては文脈次第である。Any が数詞を伴う (はっきり数を明示する) 場合 (例: *You can take any three boxes on the table.* (E-Gate)), 数はもちろん数詞の表す数である。意味は「任意」で、「周辺」の意味はあまり感じられない。

(C) その他

has any amount of money (COD 8th)

You are entitled to any number of admissions. (リーダーズ)

この *any* は、どのメンバーでもいいわけではなくて周辺メンバーを指すが、数量の尺度で高い方⁴を指す。「任意の数量→周辺→多い・少ない」となるが、現実には少ない方では意味をなさない (少なくとも英語ではそう考える) ので、多い方で周辺となる。

Any minute/day/moment/time now (=Very soon) there's going to be a massive quarrel between those two. (CIDE)

一方、この上記の例は any number/amount of ~ と類似した表現であるが、数量の尺度で高い（多い）方ではなくて、その逆の低い（少ない）方⁵ということになる。任意の時間だが、そこから周辺の時間すなわち近い時間・遠い時間を指すが、ここでは近い時間を指す。Pragmatic な問題であろう。

Before you buy *any* TV set, try out the remote. (Wisdom)

この Before~ の例は、「任意」から「周辺」への意味を表していると思われる。結果として「すべて」ということになるが、all には置き換えられない。Any は個々のケースについて述べている。他に次のような any の例がある。

You may come (*at*) *any time*. (Wisdom)

Eri is **taller than any other** student in her class.

(C) は、この「任意→周辺」の雑多な例と思われる。

肯定の *any* 「Any N+関係詞節」のタイプのもの：

「Any N + 関係詞節」のパターンをとるものを any の意味説明の項目として挙がっていることが多いことはすでに述べた。このタイプのものを再度検討してみる。

(D) 文脈から結果として every, all になる場合

「Any N + 関係詞節」の形をとっているだけで、通常の「Any N」と変わるところはない。つまり、上記の「Any N」の場合と同じく文脈から「任意→周辺」の結果として「すべて」となる。

Any child who attempts to escape is beaten. (LDCE 3rd) (*どんなよい子でも)

Any advice (= Whatever advice) that you can give me would be greatly appreciated. (CIDE)

Any doctor who did that should lose his license for good. (Wisdom)

Any idiot (=Every person) with a basic knowledge of French should be able to book a hotel room in Paris. (CIDE)

Read *any* books you find on the subject. (RHD: every; all)

Buy *any* books you want. (Progressive)

I want to be in on *any* decisions that are taken concerning this. (Wisdom)

Any bus that stops here goes to the station. (N Proceed) (*任意：周辺性はない，任意にどれをとっていても)

(E) (明示的に) all, every の意味にならない場合

田中 (2009) では「可算単数名詞なら『何でもいから1つ』となる場合」という項目であったが、通常の「Any N」のところで示したのと同様の修正をした。「Any N」のNが可算単数名詞の場合でも単純に「1つ」を意味しない。以下の例文では出典元の訳も参考のため付してある。

You can read *any* book you like. 好きな本ならどれでも (1冊) 読んでよい (Lexis)

Buy *any* book(s) you want. 欲しい本があったら何でも買いなさい (▶ *any* book の場合は「どの本でもいいから1冊」という意味合いが強い) (Progressive)

Take *any* book you like. (OALD 6th) (Favorite)

You may borrow *any* book you like. (Lexis)

通常の「Any N」で指摘したのと同様、「1つ」かどうかは重要なことではない。「1つ」かどうかというのは、極めて文脈的である。上記例文の説明文も、Lexisは「(1冊)」というように括弧に入れてある。また、Progressiveの「意味合いが強い」とは断定的ではなく程度が強いということである。もちろん、「任意の1つ」を指すのがコアであるので、その意味はどの場合でもその強弱にかかわらずあると思われる。だが、そこから文脈により結果としての意味合いが1冊になるかどうかは別問題である。したがって、可算単数名詞に対する *any* の使用が明白に「1つ」を意味するわけではなくて、また明示的に「すべて」という意味というわけでないので「(明示的に) all, every の意味にならない場合」という表現を用いて分類にした。

そうすると、田中 (2009) において「(ふつうに) どんな〜でも」として分類したのもここに入るものと思われる。以下がそこで挙げた例文である。

I don't smoke. I don't drink. I'm perfect. Ask *any* man I ever dated. (Wisdom)

やはり通常の「Any N」の場合と同様「Any N (可算複数)」の場合には、単純に複数名詞が使われていれば複数が意図されるが「すべて」というわけでない。そして、数詞がついた複数名詞であれば、その数詞の表す数である。

You may borrow *any* books you like. (新英和中辞典)

Choose *any two* books you want to read. (N Proceed)

ここでの *any* の意味は、やはり基本に「任意」があり、時に「周辺」の意味が感じられる。

(F) できる限りの (as much as possible, as many as possible)

Take *any* amount you like. (N Proceed)

They're going to need *any* help they can get. (LDCE 4th: as much as possible)

(F) の意味は確かに通常の「Any N」にはない意味である。だが上記の考察から明らかな様に、ここの (D), (E) の意味は、この関係詞修飾特有の意味ではない。すなわち、「Any N + 関係詞節」は常に「できる限りの」という意味ではわけではなく、そういう意味になるときがある、そしてそれはそれ以外のパターンでは見られない意味だということである。

通常の「Any N」にはこの (F) の意味はないので、この「Any N + 関係詞節」というパターンがその意味に関係していると考えられる。だが、このパターンになれば必ずこの (F) の意味になるというわけではないので、このパターンのみでこの意味を形成しているわけではない。このパターンとそれを取り巻く文脈がこの意味を形成していると考えられる。この (F) の意味の場合、「Any N」に続く関係詞節の中の動詞 *like*, (*can*) *get*, そして「Any N」を目的語にとる動詞 *take*, *need* などがこの意味形成に大きく関わっていると思われる。そして、この *any* の意味もやはり「任意」であり、そこからこの文脈により「周辺」の意味が読み込まれ、さらにこの場合「多い方」へ「周辺」の意味が誘導されている。

3.2.3.2 非肯定文(疑問, 否定, 条件等)におけるこの *any* のコア的意味の検証

再度、「『弱い, 強い Any』, 『Any I, II, III』及び『冠詞 *a*, ゼロ冠詞』の関係」を参照してもらいたい。

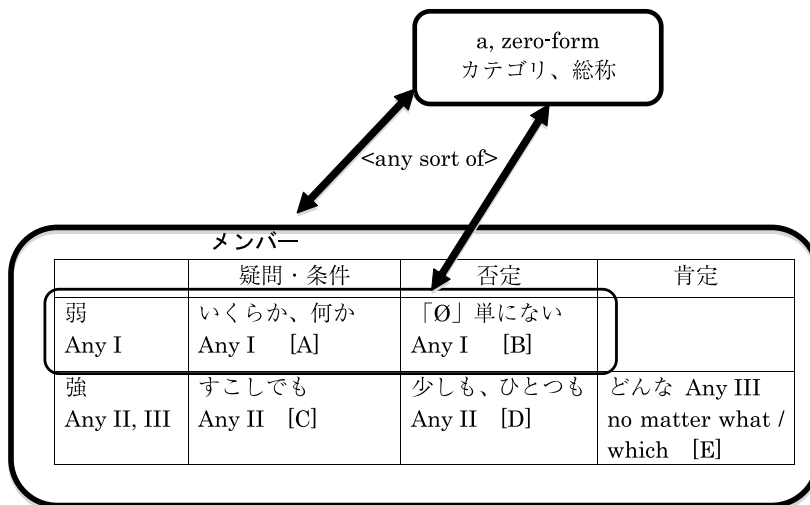


図3：「弱い、強いAny」, 「Any I, II, III」及び「冠詞 a, ゼロ冠詞」の関係

弱い Any (A), (B)

Any (A) (弱い Any 疑問・条件)：単純に任意のものを取り上げる。「周辺性」を表す意味はない。「いづらか、何か」というような意味になる。

Any (B) (弱い Any 否定)：単純にないという意味。「周辺性」を表す意味はほとんどなく、任意のメンバーで間接的にその所属するカテゴリー、すなわち全体を否定する。直接否定するわけではない。このようなプロセスの違いは、同じ否定といっても意味合いの違いを生む。また、非文を生むこともある。Nancy is not a student. は直接カテゴリー 'student' に所属していないことを示している。直接否定である。ところが、*Nancy is not any student. では、'student' というカテゴリーの任意のメンバーを取り上げて、そのどれでもないということを行い表そうとしている。ここでは、Nancy は単純に student ではないと言いたいので (そうとすると)、any を使うと違った意味合いになり、その結果非文となる。

強い Any (C), (D) 「周辺性」の意味が強い。

Any (C) (強い Any 疑問・条件)：「少しでも」というような意味。

Any (D) (強い Any 否定)：「少しでも、ひとつも」というような意味。「弱い any (B)」におけるようなメンバーの所属するカテゴリーの単なる否定ではない。

「弱い Any (A), (B)」で any が可算名詞に対して使用される場合には、通常複数形が用い

られる。この any, つまり Any I は Sahlin によると “lightly quantitative” (1979: 94) (弱い数量的な意味) を特徴としている。否定に単数で用いると, 「少しも, ひとつも」という読みになり「強い any」になる傾向がある。同じように, 疑問, 条件に単数で用いると, 「少しでも」という読みになり「強い any」になる傾向がある。Sahlin は, 「強い Any (C), (D)」に可算名詞の場合単数が多いことを次のように述べている。“Any II is most frequent with Sg Count (cf. 4.2.1) . . . This preponderance of Sg Count may be a reflex of the feature [+ Individual] . . .” (Sahlin 1997: 97) あくまでその傾向があるということで単数・複数で絶対決まるという機械的なものではない。そこが難しいところである (cf. 田中 2007)。単数・複数は, 解釈に影響を与える重要な文脈のひとつだが, それだけで解釈が決まるわけではない。

「弱い Any (A), (B)」および「強い Any (C), (D)」の例 :

(A) 弱い any 疑問, 条件

Do you speak *any* foreign languages?... (COBUILD 2nd)

Are there *any* ladies in the audience?... (COBUILD 2nd)

Have you got *any* cheese I can have with this bread? (COBUILD 2nd)

“She’s not a man, mister,” he said. “I am. If you’ve got *any ideas*.” (Sahlin 1979: 91)

If that’s *any help* (Sahlin 1979, p.91)

(B) 弱い any 否定

I never make *any big decisions* ... (COBUILD 2nd)

I’m not making *any promise* ... (COBUILD 2nd)

We are doing this all without *any* support from the hospital... (COBUILD 2nd)

Earlier reports were unable to confirm that there were *any* survivors ... (COBUILD 2nd)

(C) 強い any 疑問, 条件

Is there *any milk*? (Sahlin 1979: 97) (*少しでも whatever quantity)

did you read *any of the Táles* (Sahlin 1979: 97) (*代名詞用法であるが, ここの意味をよく表している)

The Burmese appeared to have little knowledge of British power, or *any* idea of trade. (Sahlin 1979: 21)

The closest scrutiny is owed to the Anglo-Saxon kennings and the Homeric epithets; if *any* words or phrases are formulaic, they will be. (Sahlin 1979: 21)

(D) 強い any 否定

The Burmese appeared to have little knowledge of British power, or *any* idea of trade. (Sahlin 1979: 21)

4. 結論

本研究は、以上の考察により、any はコア的意味を持つと考える。Any のコア的意味とは、「任意のどれでも」である。それは、次のようなコア意味の意味展開を持つ。いずれも平易なものである。

(i) 任意のどれでも ⇒ (ii) 周辺も含んで ⇒ (iii) all, every というプロセス

Any のコア意味が、こうした意味展開の過程で、その文脈の影響を受け、文脈の意味を取り込みながら、結果として any のさまざまな意味を生むものと考えられる。辞書・文法書等において、any は様々な意味が取り上げられる。典型的には、肯定、疑問・条件、否定の分類による意味、さらに可算単数名詞、複数名詞に対する違い、また「Any N 関係詞節」という形をとるものの特別な意味などである。だが、こうしたものはすべてそれぞれ一つの文脈である。そして、それがそれぞれ any の意味に文脈的影響を与え、そのそれぞれに応じた文脈的意味を形成する。

Any という英語語彙は、日常語であり極めて基本語である。しかも、その意味を直感的に考えた場合にも、難解に記述されるべき語ではないと思われる。実際、本研究で提唱した any のコア意味、その意味展開のプロセスの理解は難しくない。Any の持つ意味を直感的に捉えたものに近いものと思われる。その意味でも、本研究の提唱する any のコア的意味は指示されるのではないかと信じる。

後注

- 1 このような some と any の関係の捉え方、記載の仕方は、筆者も含め反対の立場を取るものもあるが (Bolinger 1977, ピーターセン 2004)、ピーターセンが言うほど日本の学校文法独特の特徴ではない。Some, any の詳細な研究をしている Sahlin (1979) もそのような解釈をしているし、最近の認知言語学テキスト Radden & Dirven (2007) も「学校英文法」と同じ捉え方をしている。
- 2 Sahlin (1979) の Any I の “any sort of” この特徴表現の妥当性については検討を要すると思われる。

Any のコア的意味

- 3 関係しあう別々な意味が一つになって語彙を形成している多義のパターンには, family resemblance (Rosch and Mervis 1975), radial structure (Lakoff 1987) がある。その違いについては, 田中 (1996) を参照。
- 4 Sahlin は “a high point on a scale” (Sahlin 1979: 122) と述べている。
- 5 Sahlin は “a low point on a scale” (Sahlin 1979: 122) と述べている。

参考辞書

- 『E ゲイト英和辞典』, ベネッセ・コーポレーション, 2003.
『ウィズダム英和辞典 第2版』, 三省堂, 2007.
『ジーニアス英和辞典 改訂版』, 大修館, 1993.
『新英和中辞典 第6版』, 研究社, 1994.
『スーパー・アンカー英和辞典 第3版』, 学習研究社, 2003.
『ニューヴィクトリアンカー英和辞典 第2版』, 学習研究社, 2005.
『ニュープロシード英和辞典』, ベネッセ・コーポレーション, 1994.
『フェイバリット英和辞典 第3版』, 東京書籍, 2005.
『プログレッシブ英和中辞典 第2版』, 小学館, 1987.
『リーダーズ英和辞典 第2版』, 研究社, 1999
『レキシス英和辞典』, 旺文社, 2003.

- The American Heritage Dictionary of the English Language, Fourth Edition*, the Houghton Mifflin Company, 2000.
Cambridge International Dictionary of English, Cambridge University Press (CIDE) 1995.
Collins COBUILD English Dictionary, 2nd, HarperCollins Publishers, 1995.
コリンズコウビルド英語辞典 *Collins COBUILD English Language Dictionary*, 秀文インターナショナル, 1987.
The Concise Oxford Dictionary of Current English, Eighth Edition, Oxford University Press, 1990.
Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition with New Words supplement, Pearson Education Limited, 2001.
Longman Dictionary of Contemporary English, 4th Ed. Pearson Education Limited, 2003
New College Edition The American Heritage Dictionary of the English Language, Houghton Mifflin Company, 1969.
Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Sixth Edition, Oxford University Press, 2000.
The Random House Dictionary of the English Language, Random House, Inc., 1973.
Webster's New World College Dictionary Fourth Edition, Macmillan · USA, 1999.

参考文献

- 池内正幸, 『名詞句の限定表現』新英文法選書 第6巻, 大修館, 1985.
川瀬義清, 「Some と Any: Some に関わる問題を中心に」『西南学院大学英語英文論文集』第29巻, 1989.

pp.13-27.

田中茂範, 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社, 1990.

田中 実, 「Over の多義性—その記述の教育的問題と認知意味論的考察—」『川村短期大学研究紀要』第 16 号, 1996, pp.171-178

田中 実, 「Any の意味記述の困難さ」『川村学園女子大学研究紀要』第 18 卷 第 3 号, 2007, pp.13-35.

田中 実, 「Any の意味—英英辞書から any の意味を探る—」『川村学園女子大学研究紀要』第 20 卷 第 2 号, 2009, pp.139-169.

ピーターセン, マーク, 『ニホン語, 話せますか?』, 新潮社, 2004

Bolinger, Dwight. *Meaning and Form*, Longman 1977.

Hirtle, W. H. "Some and any: Exploring the system", *Linguistics: An Interdisciplinary Journal of the Language Sciences*, Vol. 26 no. 3, 1988, pp.443-477.

Lakoff, George. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.

Radden, Gunter & Dirven, Rene. *Cognitive English Grammar*, John Benjamins 2007.

Rosch, Eleanor. 'Cognitive representations of semantic categories.' *Journal of Experimental Psychology: General* 104, 1975, pp.192-223.

Rosch, Eleanor and Caroline B. Mervis. 'Family resemblances: studies in the internal structure of categories.' *Cognitive psychology* 7, 1975, pp.573-605.

Sahlin, Elisabeth. *Some and Any in Spoken and Written English*, Uppsala, Almqvist & Wiksell International, 1979.

Tanaka, Minoru, "Reconsideration of some and any", *The Journal of Kawamura Gakuen Woman's University*, Vol.19, No.2, 2008, pp.83-95.